

七・七・三〇 中野操) というのである。このことについて直ちに判断することは、演者の力の及ぶところではない。

なお、『解屍篇』『解屍篇原註』『解屍篇講録』『解屍篇奇聞』は、現在筆稿途中であり、詳細についてはいづれ論文にして発表したいと考えている。

(新潟県小千谷市立片貝小学校)

『真齋謾筆』の小児門について

広 田 曄 子

安藤昌益(一七〇三—一七六二年)は江戸時代中期の思想家で、八戸において医者として活躍した人物である。その稿本『自然真営道』(全百一卷・九十三冊)は自己の自然哲学を宇宙論的に体系つけた一大哲学思想大系をあらわしたものである。しかし、関東大震災によってその大半は焼失してしまい、現存するのは十五冊のみである。したがって昌益の医方を知ることが出来るのは『真齋謾筆』にだけである。これは、昌益医学の病論と療法を中心に、『自然真営道』第七十三巻から第百巻に至る臨床医学各論の骨幹を抄出、筆写し、若干の注釈を加えたもので、宇都宮の町医であった真齋(一七八九?)という人物が著したものである。

『真齋謾筆』の文章は漢字仮名まじり文であるが、『自然真營道』稿本は漢文調の文章であったと思われる。また、昌益は生薬名に略字、合成字、造字をあてたようである。

『真齋謾筆』小兒門は、「天・地・人」の三巻の天の巻にあり、『自然真營道』の第七十六、七十七、七十八巻の小兒門巻に相当する。

小兒門は五つに分かれている。

(一) 初生養護について、および乳児のかかりやすい疾患(口、舌、目、耳、鼻の病氣や寄生虫病、肛門の病氣や尿や便の異常、水腫、黄疸など)について。

(二) 幼児のかかりやすい病氣について。すなわち、熱病、腸の病氣、疳、癍疾、発熱性疾患、嘔吐、咳嗽、喘息などについて。また、発育異常や発育の特徴をとらえて體質的に分類し、治療法を述べている。たとえば、齒、髮、ことば、聴力、視力などについて述べている。

(三) 痘瘡、麻疹について。

(四) 人相学的な見地から體質を推察し、将来かかる病氣を防ぐ処方を記している。

(五) 咽喉の病について。

以上のように、その分類はかなり特異なものと思われる。つぎに、記載された処方数は全部で一八一処方であり、そのうち内服は一七一処方、外用一〇処方である。内服のうち一六六処方は煎剤であり、残りの五処方丸散剤である。

構成生薬の数で最も多いのは八つで、九六処方である。次に多いのは四つで、三二処方である。最も多くても一の生薬で構成されており、一二を越えるものはない。このように構成生薬数が一〇以下のものがほとんどであるといふことは極めて日本的傾向であることは過去に調べたところからも言えることである。しかし、普通は正規分布的に構成生薬数があらわされるのに対し、『真齋謾筆』小兒門では構成生薬数が八つや四つのものが多いという特徴がある。

これは、安藤昌益の哲学に基づくものである。すなわち、昌益の五行論の特徴が、五行の各々が他の四行をその内に具備しているとみなしているため、八気互性に基づいて処方をつくっているために、八つの構成生薬からなる処

方が多くなり、つぎに八の半分の四つのものが多くなるためと思われる。

ここで、驚くべきことは、処方ほとんどが八氣互性に基づいて安藤昌益自身が組み立てたものであり、中国の医学の模倣ではないという点である。

演者はこれまで、安藤昌益以前、以後の時代の小児門について調べてきたが、そのほとんどの処方は中国医書からの抜粋であった。

また、昌益の処方名のつけ方も独特で、たとえば止血湯とか殺虫湯とかいった具合に、その処方の作用を名前としたものが多く、わかりやすく出来ている。

その内容をみても、原因としては胎毒が最も多く挙げられている。また、前述のように四行に基づいた臟腑弁証的記述が多い。

以上のように、『真齋謾筆』には煎剤が多く記載され、しかも一〇くらいまでの構成生薬から成るものが多い点は極めて日本的といえるが、全く新しい哲学体系をつくり、それに基づいて独自の処方をつくりあげている点は中国医学の模倣に終始していた他の日本の医書とは全く異なる。

安藤昌益が吉益東洞と同時代人であったことを思う時、時代がどのようにに獨創性に満ちた人々を生み出したように思われる。

(東京都三鷹市)